慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクスにおける二つの労働分割
Sub Title	On the dual division of labour of Marx
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1983
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.76, No.3 (1983. 8) ,p.457(83)- 471(97)
JaLC DOI	10.14991/001.19830801-0083
Abstract	
Notes	特集 : カール・ マルクス : 没後104年 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19830801-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルクスにおける二つの労働分割

野　地　洋　行

1.　スミスにおける二つの労働分割
2.　「資本論」における二つの労働分割
3.　予備的考察
4.　作業場内労働分割の論理と合理主義
5.　労働過程の変容
6.　結び——二つの労働分割と社会思想

1.　スミスにおける二つの労働分割

社会思想史という視点からみれば，アダム・スミスの分業の理論——正しくは「労働分割」(division of labour) の理論——の歴史的意味は，富の本源的な資源 fund が労働であること，富を増大させるもっとも確実な方法がこの労働を分割することであることを立言し，このことによって富の理論，生産力の理論としての経済学の領域を確立した，ということだけには決してとどまらない。労働を分割すること，というかれの視点は一ピン工場の，たかだか数人の職人が行っている，誰の目にもみてとりやすい場面から一挙に拡大される。スミスは，文明社会の富は一社会の人々が実は一社会全体の労働を分かち合うことによって成り立っているのだ，と想像力や抽象力のみが可能にする巨大な場面へ飛躍する。このとき，思想史の上に巨大な歩みが踏み出されたといってよい。一言でいえば，このとき富の視点を媒介としながら，人間たちの社会関係が労働の社会関係であり，社会の中の人々の関係とは，社会全体が必要としている労働を互に分割し合っている関係なのだとみる視点が成り立ったのである。こうして思想史は政治や法の思想史，国家の思想史から経済の思想史へと転換し，人々の関係は法や権利の関係であると同時に，生産や労働の関係でもあるという認識が成立したのである。スミスの分業論が，単に経済学としての経済学の上にだけ大きな意味をもつわけでは決してないというのはこのためであり，労働価値説という理論的立場も決して無前提のものではなく，社会全体の労働の分割とその成果の交換という壮大なヴィジョンを想定してはじめて可能になるものである。

それゆえ，アダム・スミスが二つの労働分割の世界を混同しているということは，しばしば指摘される点であるけれども，これは決してスミスにとってただ不名誉なことというわけではない。ス

ミスは，いわば誰にでも「一目で見渡せる」[(1)]マニュファクチュア内の分業の光景を手がかりに，それを一目で見渡すことのできない社会的分業に，いわば直接重ね合わせることによって，労働によって互に結ばれ合う人々の社会的連関を把握することができたのであるから，この点では，この混同こそがスミスの理論的想像力をして新しい社会像に到達せしめる足がかりとなったともいえるのである。

しかしながら，スミスが混同したこの二つの分業——労働分割——の場面はもちろん原理的に相異なるものである。社会思想史的にみれば，スミスにとってはむしろ名誉とさえいっていいこの二つの労働分割の混同は，スミス以降にあっては決して名誉などではない。この稿の目的は，マルクスの「資本論」において，この二つの労働分割がいかなる理論的関連においてとらえかえされているか，20世紀も押し詰った現段階において経済学としての経済学，経済学としての「資本論」ではなく，社会観や社会思想の視点から，「資本論」におけるこの二つの分業——労働分割——のその後を，さらにいえばスミス以後のそのありようと，あえていえばこれに関するマルクスの分析の現代的意味とその射程の深さとをさぐろうとするところにある。

「分業」という言い古された訳語をくりかえし「労働分割」と言いかえるのは，生産力的に読みならされた division of labour のイメージ[(2)]をもう一度“労働を分割しあっている人間たちの関係”としてよみかえる社会思想，社会観の側からの努力と理解されれば幸いである。経済学としての経済学の立場からではなく[(3)]，この方面からの努力もまた許されてしかるべきであろう。

稿をはじめるに当って，“二つの労働分割をめぐるスミスとマルクス”について論ずるとすれば，論理的には当然経ておかなければならないいくつかの手続き，とりわけスミス労働分割論をマルクスが受けとり発展させるに際して加えたその哲学的，人間論的，方法的検討はここではふれないことを断っておきたい。またこの稿のテーマは，初期のマルクスから「資本論」段階のマルクスへの思想的展開を前提にしてはじめて論ずるべきであることも十分弁えているけれども，この点についても限定されたこの稿の問題設定では，それ自体として論ずることができないこともつけ加えたい。これらのことをつけ加えるのは，スミスとマルクスにおける二つの労働分割を理論的媒介を経ないで安易に結びつける愚を犯そうとしている，というありうる誤解をあらかじめ避けておきたいからである。

注（1） 経済学は「社会的分業一般をマニュファクチュア的な分業の立場からしてのみ……考察する」とマルクスはのべている。マルクス「資本論」第1部（長谷部訳）604頁。

（2） 旧版の「増訂経済学小辞典」（岩波書店，1957年版）では「マニュファクチュアにおける分業が一般に分業といわれている」とされている。

（3） スミスの労働分割論のマルクスによる継承と批判については拙稿「スミス分業論と初期マルクス——労働分割論と労働疎外論の関連についての考察——」三田学会雑誌，69巻6号（『国富論』刊行200年記念特集号）1976年，を参照されたい。

2. 「資本論」における二つの労働分割

「資本論」における二つの労働分割の論理的連関を確認する前に，まず「商品論」それ自体が社会的労働分割の一形態の分析であることを明らかにしておかねばならない。「資本論」の出発点にあるのはいうまでもなく「商品論」であるが，あらゆる理論が無前提でありえないとすれば，「商品論」の前提は労働分割論であるといえよう。社会全体の労働配分が，直接人々の意志によって行われず，物と物との交換を介して間接的に，交換の結果として実現される場合には，この分割と配分の原理は，一つの外的強制力，物的な力となり，人々の意志を逆に強制する法則性——自然法則にも似た法則性——の世界を構成することになる。(4) これこそ経済学が科学として成り立つ根拠であり，そうであるがゆえにまたマルクスによって経済学が批判されるべき理由ともされたのである。それゆえ「商品論」の世界は社会的労働分割の特殊な実現形態の世界であり，物象化された労働分割の世界なのである。こうしてわれわれは「資本論」を逆に辿ることによって物象化論を媒介に，社会的労働分割論に到達する。「商品論」の前提には「ドイツ・イデオロギー」の労働分割論があるのである。われわれは「商品論」が社会的労働分割の物象化された形態を分析対象とするものであることをまず確認するところから始めたい。ではこのようなものとしての社会的労働分割は，マルクスにおいてはどのような論理的連関によって作業場内労働分割に到達するのか。

「商品論」の第一の前提は等価交換であることはいうまでもない。(5) ここで改めてそれを確認するのは，マルクスの資本主義把握が根本的に等価交換という合理的関係の把握を前提とするものであり，暴力や政治的権力による非合理的強制の上になり立つ階級支配や搾取の政治学などではないことを確認するためである。資本主義的階級概念の特殊性，というよりは階級概念それ自体の特殊性は，もともとそれが政治的権威や権力によって支えられるとしてもそれに根拠をもつものではなく，固有な意味で経済的関係，経済法則にその成立根拠をもつところにあるのである。だから資本制生産の第一の前提が等価交換であるかぎり，そのような交換過程の担い手相互の社会関係は，自由で平等な市民相互の社会関係であり，このような社会はすなわち市民社会である。

ところで「商品論」の第一の前提が等価交換であるとすれば，その限りこの過程自体はいかなる価値の増殖をももたらすことはできない。だがマルクスに課せられた問題が資本制生産であるかぎり，この過程はまた同時に価値を増殖しなければならない。マルクスはこのアポリアを「労働力商品」なるカテゴリーを発見あるいは創造することによって突破するのである。市民社会は市民社会

注（4） 拙稿「マルクスにおける労働概念の展開——『理念』から『労働』へ——」三田学会雑誌，67巻11号，1974年，とりわけ（6）を参照されたい。

（5） 「貨幣の資本への転化は商品交換に内在する諸法則にもとづいて展開されるべきであり，したがって等価物同志の交換が出発点たる意義をもつ」。「資本論」第1部，長谷部訳，313頁。

のままで，同時に資本主義社会という階級社会に転化する。[6]「商品論」という物象化された社会的労働分割の理論は，かくして「労働力商品」の概念を媒介に，論理的断絶なしに階級関係の理論に転化することがはじめて可能になった。マルクスが，みずからの二大発見の一つとして剰余価値の秘密の発見をあげるのも，かつて何人も等価交換（市民社会）を前提にしながら，しかも剰余価値が生まれ，階級関係が成立する秘密を，合理的に説明しえたものがいなかったからに他ならない。

かくして労働力を含めた商品世界がそこで展開される商品交換の場面は「事実上，真の天賦人権の楽園であった。ここでもっぱら支配的に行われるのは自由，平等，所有および[7]ベンタム」であり，市民の楽園であり，これこそ本来ホッブズ，ロック，ルソーが形成してきた市民社会の構成原理なのであり，われわれ社会思想史家の研究領域なのである。だがわれわれは交換や流通の場面に立ち止まらずに，さらに「労働力」がそこで消費される直接の生産の場面に入っていこう。ここはすでに「天賦人権の楽園」でもなければ，自由で平等な市民社会でもない。なぜならここではすでに規定によって人間は「労働力商品」であり，生産過程はこの商品の消費の過程そのものだからである。いかなる商品もそれが商品であるかぎりどんな人権ももたないように，労働力としての人間はどんな天賦の人権ももたず，この場面の主権者でもなく，この場面の「市民」でもない。かれが「市民」であるのは，かれがその私有財産である労働力を売るまでであって，直接生産の場にあっては，かれは主権者にふさわしいどんな市民権をももちはしないのである。総じてどんな商品も法の主体とはなりえず，どんな商品も権利の主人ではありえないように，「労働力」商品もまたそのようなものとしては法の主体とはなりえない。労働力商品として，やがて作業場内労働分割の世界の中へ，資本の絶対的権威と指揮の下に入りこむことになる人間たちはこのようなものであり，また逆にそうであるがゆえに資本の指揮が可能となる。

「労働力」商品の形成を契機に，商品流通は資本流通に転化する。人々は交換の場面においては互いに市民として自由と平等と私有財産の権利を享受しながら，直接の生産の場においては商品世界の掟に従って支配，従属の関係に入ることとなる（このとき以来，人間の世界は法学の世界と経済学の世界とに二重化する）。そしてこの時，生産は価値増殖それ自体を目的として営まれることが可能となり，この世界の動因は無限の価値追求となる。

われわれは「資本論」第1部のはじめの四つの篇のうち，最初の二つを追ってきた。第1篇「商品と貨幣」の前提は等価交換であった。等価交換を前提にしながら価値増殖が可能になるのは唯一つ「労働力商品」の成立と存在によってのみであり，こうして第2篇「貨幣の資本への転化」の道がひらかれる。資本がひとたび成立すれば，この無限の価値追求にはただ二つの道があるのみである。その一つは第3篇に展開される「絶対的剰余価値」への道である。けれどもこの道はそれだけ

注（6）ここで平田清明氏の諸著作が想起されてよい。たとえば「市民社会と社会主義」1969年。
（7）「資本論」第1部，327頁。

ではおのずから限度がある。労働時間の延長や労働強化による価値の追求は人間の自然的限界につき当るからである。この道が歩みつくされるとき，価値追求は第二の道すなわち第4篇の主題たる「相対的剰余価値」の追求へと進まざるをえない。すなわち労働力商品の価値を低下させることによって剰余価値を増大させる道である。この労働力商品の価値低落は一人一人の資本家によって目的とされるのでは決してなく，市場における競争によって強制された労働の生産性の上昇の結果としてのみもたらされる。

これらのことを愚かしくくりかえす目的はただ一つ，次の結論を「資本論」の論理展開の結果として獲得したいからにほかならない。すなわち，資本制的社会関係が「協業」，「マニュファクチュア」，「機械と大工業」を生みだすのであって，その逆ではないということである。それゆえ，これを端的に資本主義は必然的に作業場内労働分割と機械を生むといっていいであろう[8]。資本主義の発展に技術や科学の発展がともなうのを見て，人は技術や科学が資本主義を生むのだと考える。関係は逆であって資本による生産が技術や科学の発展を無限に駆りたてるのだ。手工業を技術的基礎とするマニュファクチュアを見れば，人々をマニュファクチュア内労働分割へ駆りたてるものは科学でも技術でもなく，資本なのだということが一目で判る。ここではボルケナウがいうとおり[9]，技術の手工業的性格は何も変ってはいないからである。こうして社会的労働分割は，労働力商品の成立を転機としてそれ自体を前提にしながら作業場内労働分割を生みだすことになる。

この稿のテーマにそってもう一度言わんとするところを要約すれば，資本主義はそれが価値増殖を根本動因とする生産システムであるかぎり，その手段として人々をマニュファクチュア的労働分割に駆りたて，たえずそれを拡大し，やがて機械と大工業を生み落す。スミスが作業場内労働分割の光景を手がかりに社会全体の労働分割を想定しえたのは，スミスの卓見であったことはすでにのべた。マルクスにあっては，作業場内労働分割こそが資本制生産の中に生きる人々の宿命としてとらえかえされている。それは原理的にはわれわれ自身の宿命であるといえよう。われわれの課題はわれわれの宿命の構造を認識することである。

3. 予備的考察

若きマルクスの思想的原点は，「労働」こそは人間が人間である証しであり，人間が人間になる契機であるという考えであった。もちろんこの「労働」はたった1人の労働ではなく「類」という社会的概念と結びついた人間たちの共同労働であり，かつ「目的意識的」な人間の活動という拡が

注（8）「機械は剰余価値を生産するための手段である」。「資本論」第1部，610頁。

（9）Franz Borkenau; Der Übergang vom feudalem zum bürgerlichen Weltbild. Studien zur Geschichte der Philosophie der Manufacturperiode. Paris, 1934. Unveränderter reprografischer Nachdruck, Darmstadt, 1971. S 2, 水田他訳 I，24頁。

りをもつものであった。[10] それゆえに人間の労働の運命こそは，マルクスにとってとりもなおさず人間そのものの運命と考えられていたといってよいであろう。われわれが執拗に「分業」を「労働分割」といいかえるのも，マルクスが労働にあずけた人間論的意味あいをたえず想起したいためでもある。

前節でわれわれは作業場内労働分割こそが資本制生産における人間の労働の宿命であることをみた。とすれば，この節の主題はこの宿命たる作業場内労働分割の構造，その論理の解明でなければならない。スミスがマニュファクチュアでの労働分割を手がかりに，一目では見渡せない社会全体の労働分割を把握しえたのとは逆の方向で，社会的労働分割が労働力の商品化を転機に，人間たちを作業場内労働分割の世界へと駆りたてるのだとマルクスはいう。人間の労働に目をあてれば，ここには労働過程——人間と自然の間の物質代謝の全プロセス——に根本的な変化が起っていることに気がつく。その構造変化の分析は，人間そのものの運命の分析につながるだろう。

ところでマルクスが社会内労働分割[11]と作業場内労働分割とを対比するのは「資本論」第1部第4篇中のマニュファクチュアの章においてである。ここでの主題に入る前に，なぜかれがとくにここで二つの労働分割の論理を対比するのかをあらかじめ考察しておきたい。なぜなら，資本制的生産様式はもちろん「マニュファクチュア」で立ち止まるものではなく，「機械と大工業」へと推転してやまないからである。この第4篇では「協業」「労働分割とマニュファクチュア」「機械と大工業」と三つの生産様式が展開されているが，なぜ作業場内労働分割の一般的原理の分析を「機械」でなく，とくに「マニュファクチュア」においてするのかが理論的に問題となりうるからである。

第一の協業は，資本による労働の社会的，共同的形態ではあるが，ここではそもそも労働過程の分割自体がいまだ行われてはいず，さらに協業自体は資本制生産に固有なものではないから，ここに資本制に固有の作業場内労働分割と編成の原理を求めることはできない。これに対して第三の「機械」においては労働の社会的，共同的形態を強制するのはもちろん資本であるけれども，ここでの労働の分割と編成の原理はすでに労働自体に求めることはできず，労働手段に求めねばならないからである。つまり労働の分割原理の主役は労働から労働手段の方へ移行してしまっているのである。「機械の出発点は労働ではなくて労働手段である」[12]。それゆえ資本制生産に固有な労働の分割と編成の原理は，技術も労働手段も資本制以前とさしあたって基本的には変らない「マニュファクチュア」[13]において，もっとも明白に，かつそれ自体として見ることができるだろう。この章が「労

注 (10) この点については拙稿「初期マルクスにおける理念（上）」三田学会雑誌，61巻12号，1968年を参照。

(11) マルクスはここでは「社会的」労働分割とはいわずに社会のなかでの（innerhalb）労働分割という表現をとっている。

(12) 「資本論」第1部，621頁の注，また610頁でも同じことをのべている。

(13) 「生産様式そのものに関しては，たとえばマニュファクチュアは，その初期においては……同職組合的手工業とほとんど変りがない。同職組合親方の作業場が拡大されているだけである」前掲書，543頁。「手工業的熟練はいぜんとしてマニュファクチュアの基礎であり……」前掲書，608頁。

働分割とマニュファクチュア」と題されたのは，ここではじめて資本の指揮下での労働分割，すなわち社会の中での労働分割とは本質的に異なるものとしての，資本制生産の「まったく独自の創造物」[14]としての新しい労働分割が成立し，その基本的構造の分析が課題となっているからである。

従来，「資本論」のこの部分は理論的には資本と賃労働の対立，前者の後者に対する抑圧，収奪という点に重点を置いて理解されてきたように思われる。あるいは産業革命期における苛酷な労働収奪の歴史的事実として，資本蓄積の苛烈さの列挙として，資本制生産の非人間性の弾劾としてよまれてきたのではなかろうか。経済学的にはこれらの生産様式は労働力商品の価値低落の手段としてだけ理解され，生産力増大への無限の志向が価値増殖に動機づけられていることの解明，資本制生産の本質暴露という点を中心によまれてきたといえるかもしれない。また実際マルクスの論述のしめくくりかたもそのようなものであるといってよい。それゆえ経済学の外での研究を別とすれば，[15]この部分は資本制生産における人間労働の形態変化，労働過程変容の理論的解明としてさほど注目されなかったのではないかと思われる。一言でいえば，労働者はこんなに抑圧されているのだという形でよまれてきたのではなかろうか。だがもし労働が人間の本質，その証しであり，人間の概念をそれとは別の所に求めることができないとすれば，ここでの人間労働の運命もまた，われわれ社会思想家の分析の対象でありうるはずである。それは資本制生産における人間そのものの運命の解明につながるはずだからである。もちろんこのような主張は資本支配の本質把握とならんで，資本支配の形式の認識もまた重要であると主張しているにすぎない。[16]

ところで資本制生産による人間の労働の変容はもちろん「マニュファクチュア」において停止するものではない。それは「機械と大工業」においてさらに激しく進行するだろう。たとえば「労働」の「均等化」や「水準化」は「機械」においてより一般的に進行する。その点に関してはさらに稿を改めて論ずることにしたい。だがマニュファクチュア以後，生産様式の変革の中心となるのは労働手段であって，もはや労働ではないことはすでにくりかえしたとおりである。

やがて人間は機械に目を奪われ，生産するのは機械だと考えるようになる。労働は機械の陰にかくれ，むしろその附属品のようにみえるようになる。[17]だから資本に支配された労働過程の分割原理

注(14) 前掲書，596頁。

(15) このような研究としてはたとえば中岡哲郎「工場の哲学」1971年，ならびにその他の著作，労働社会学の Georges Friedmann; Le travail en miettes, Paris, 1956. Sept études sur l'homme et la technique, Paris, 1966. 天野恒雄訳，などがある。

(16) だからといって，この「形式」が資本制だけのものだと主張するつもりはない。社会主義が資本主義の生み落した生産力の継承者であるかぎり，それは「機械と大工業」をも継承するのであり，そうであるかぎり，ここで明らかにするような労働の形質をも継承するのは明らかである。だから社会主義においてこそ合理化や官僚制が問題なのである。マルクスは「機械」を生みだすのは資本主義だけだとしても，その充用が資本主義に固有なものとはみていない。たとえばユーアの機械体系に対する定義へのコメントを見よ。「資本論」第1部，680頁。またつぎのような論述も留意されたい。「労働者が機械をその資本制的充用から区別し，したがって彼の攻撃を物質的生産手段そのものからそれの社会的利用形態に移すことを学ぶまでには時間と経験とが必要だったのである」前掲書，693頁。

(17) 「マニュファクチュアおよび手工業では労働者が道具を自己に奉仕させ，工場では労働者が機械に奉仕する。……

を，労働そのものの視点から分析しようとのぞむならば，まだ機械が生産の主役，主人公として登場していないマニュファクチュアの段階で考察しなければならないだろう。そこではいまだ生産力の主役はいぜん労働であり，労働者であり，労働者の手の技術なのである。[18] ここでの労働過程の分割と編成の原理が「純粋に主体的であり，部分労働者の結合」[19]であるとすれば，この「主観的な分割原理」は機械とともに逆転し，やがて労働者が労働分割の主人ではなく，労働手段（機械）の「客体的」な構造がこの分割と編成の「主体」となり，労働者たちはその附属品となるときがくるだろう。このとき人々は「労働過程」に関心をおいたり「労働分割」に注目するよりは，主役となった機械に瞠目し，それを主導する科学や技術に注意と敬意を払うのだ。

4. 作業場内労働分割の論理と合理主義

マルクスは二つの労働分割を対比する。商品の生産と流通は資本制生産の前提なのだから，マニュファクチュア的労働分割は一定程度に成熟した社会的労働分割を必要とする。そしてマニュファクチュア的労働分割は反作用的に社会的労働分割を発展させる。ここではマルクスは言葉少なく述べているが，言葉少ない理由は先行する諸章がすでにその関連を語り終えているからである。商品を媒介とした社会的労働分割が第一の前提であり，第二の前提は「労働力」が商品世界に参加することである。それと同時に価値追求は一人立ちして歩きはじめ，それによって資本は商品となった労働力を思いのままに購買し，その権威と計画によって配列する。こうして作業場内労働分割が成立するのである。

同時に存在するこれら二つの労働分割は同じものではない。マルクスはいう。「社会内労働分割と作業場内労働分割とのあいだには数多くの類似があり，また関連があるにもかかわらず，両者は程度上ばかりでなく本質的にも相異なるものである」。[20] ではこれら二つの労働分割の原理的な相違点は何であろうか。

まず，これら二つの労働分割においては，労働主体とその労働の成果である商品の関係が根本的に異なっていることに気がつかねばならない。第一の労働分割（社会内）において労働主体は一商品全体をつくりだす過程全体の主人であり，かれはあらゆる意味でその商品の主人である。ところが第二の労働分割（マニュファクチュア内）においては，各労働主体はもはや一商品をつくりだす過

マニュファクチュアでは労働者たちは生きた一機構の手足をなす。工場では死んだ一機構が労働者たちから独立して実存するのであり，労働者たちは生きた附属品としてこの機構に合体される」。「資本論」第1部，684頁。

注（18）「マニュファクチュアでは労働者たちは……かれらの手道具をもって特殊的な各部分過程を遂行せねばならぬ。労働者が過程に適合させられるとしても，過程の方もあらかじめ労働者に適合させられているのである。この主観的な分割原理は機械的生産の場合には見られない。」前掲書，622頁。

（19）前掲書，630頁。

（20）前掲書，589頁。

程の部分労働者にすぎない。これら部分労働者の共同生産物だけが商品となるのであって，かれはどんな意味でもその商品の主人ではない。労働と一商品全体の生産過程の間には，いまや決定的な分裂が生じている。そしてこの分裂こそが，社会的労働分割に対してだけでなく，同じく資本に支配された共同労働の形態である「協業」に対する，マニュファクチュア内労働の特徴なのである。単純協業においても，労働者はすでに労働力商品と商品の所有者ではない。しかし労働主体としてのかれは，いぜん一商品全体の生産に関与しているのであって，かれの労働自体が部分化されているわけでは決してない。

第二に，これら二つの労働分割において，各労働主体の労働を結びつけ関連させる契機が対比される。前者ではそれは市場を媒介とする生産物の売買であり，後者では労働力が商品として同一の資本に売られることである。これを生産手段の点からみると，前者では生産手段の各生産者への分散が，後者ではその集積が前提となっていることがわかる。後者のような関係全体は，歴史的には，生産手段が資本として集積されているということと同義である。

第三に，二つの労働分割における分割と配分の原理についてみると，第一の労働分割における分割原理は市場価格の絶え間ない変動，偶然と無規則的恣意を通して貫徹する価値法則であり，それは結果としてのみ，ア・ポステリオリにのみ，事後的にのみ認知しうるのであって，あらかじめ計画したり予知したりすることはできない。これに対し第二の分割においては，すでに資本が生産手段を一手に握り，労働力を商品として一手に買いとり，そのようなものとしてまさに商品の全生産過程の支配者となっていることからも推察されるように，ここでの労働分割の分割原理は「比例数または比率性の鉄則」であり，この鉄則はア・プリオリに，かつ計画的な規則や規律としてマニュファクチュアの中に貫かれる。ところでこのような分割原理は一人一人の労働主体によってそのようなものとして自覚され，意識されているわけでは決してない。一人一人の人間たち，労働主体たちにとって，かれらをそのような分割原理に結局は追いやっていく力は，直接的には前者にあっては「競争の権威」，後者にあっては資本の「無条件の権威」である。

このように考察してくると，「資本論」体系の論理展開をふまえて，労働主体としての人間とその労働の関係からいうとつぎのようになろう。労働力が商品となる，ということを分岐点として労働主体としての人間は資本の支配する新しい共同労働の世界へ入ることになる。それは最初は単なる協業であったが，やがて人々は新しい労働分割の世界に，すなわちマニュファクチュア的労働分割の世界に，労働という点からみてより一般的な言葉でいえば「作業場内労働分割」の世界の住人となる。そしてこの世界の原理，この世界の掟は整理してみるとつぎのようなものとなろう。

第一に労働力は一個の商品であるから，労働力商品としての労働者は労働の場面においては資本の「無条件の権威」の下に従属しなければならない。第二にこの権威の内実は，社会的労働分割のような事後的なもの，ア・ポステリオリなもの，「神の見えざる手」にのみゆだねられたものでは

なく，「先験的」で「計画的」なものであり，したがって予測されうるものである。[21] ところで第三にこの「権威」や「計画」が労働配分，労働分割において実現されるさいの視点はもちろん価値増殖であるが，その原理は「比例数」または「比率性」の鉄則であり，「数学的に確定的な比率」の原則であり，「量的な規則および比例性」[22]という規律である。第四に，この規律は「資本の見える手」にゆだねられるのであるが，労働主体たる労働者=人間はこの労働分割の世界にあるかぎり，この権威に対して「受動的・静観的」な態度をとらざるをえない。総じてある「計画」や「予測」が可能であるのは，ある状況が与件とされるからであり，この状況が不変とみられることが不可欠である。そしてこの「計画」を実現するためにある「権威」が予定されるとすれば，この権威の対極にはこの権威に服する人間たちにそれを受けいれる態度がなければならないからである。第五に労働主体としての人間たち，労働力商品であるかぎりでの人間たちは，この新しい労働分割の世界では自分たちが共同でつくりだす商品との関係においても，自分自身の労働との関係においても，もはや主人ではありえない。かれはいまや部分労働に従事するにすぎず，しかもこの部分労働自体もかれ自身の意志によって計画，立案されるわけでもなければ，全体労働（作業場内全体の）とかれの部分労働との関係も，またかれのあずかり知るところではない。それらのことがらは，すべて労働主体としての人間自身からは奪いとられ，かれが遂行する労働は「部分化」され，かつ「専門化」されたものとなる。第六に，マルクスはマニュファクチュアの章では明確にのべていないけれども，ここで進行している労働の「平均化」，「同質化」，「水準化」をつけ加えねばならない。[23] マルクスが「協業」においてこれらにふれながらここではふれないのは，マニュファクチュアが手工業的技術を全体の構成の前提としているかぎり，ここでは同一の労働の協業という側面では労働の平均化が進行するけれども，他面，労働分割という側面では異種労働間の等級化が同時に進行するからである。[24] だから一般的な形での労働の平均化，同質化への圧力は，理論的には機械と大工業にいたって完成されると考えるべきであろう。

㈠資本の「権威」。㈡「先験的」「計画的」規則。㈢「比例数または比率性の鉄則」。㈣「非能動的，受動的態度」。㈤「部分化，専門化」。㈥「平均化，同質化，水準化」。これら一連の特質は，

注（21）「かれらの諸労働の連絡は，観念的には資本家の計画として，実践的には資本家の権威として」実現される。前掲書，556頁。

（22）「マニュファクチュア的分業は，社会的全体労働者の質的に相異る諸器官を簡単化し，かつ多様化するばかりでなく，これらの器官の量的範囲のための……数学的に確定的な比率をも創造する。それは社会的労働過程の質的編成とともに，量的な規則および比例性を発展させる。」前掲書，577頁。これはM・ウェーバーの「計算可能性」のマルクスによる把握であろう。もちろん数による計算は，より一般的な（言語）記号による計算の特殊ケースである。

（23）「価値に対象化される労働は，社会的平均質をもつ労働であり，つまりある平均的労働力の発現である」「価値増殖の法則は……最初から社会的平均労働を運動させるとき，はじめて完全に個々の生産者にとって実現するのである。」前掲書，544頁，545頁。

（24）「自動的工場では，マニュファクチュア的分業を特徴づける特殊化された労働者たちの等級制の代りに，機械の助手たちが遂行すべき諸労働の均等化または水準化の傾向が現れる」。前掲書，681頁。

ルカーチが要約している「合理化の原理」の諸特質そのものと一致することは明らかであろう。すでにルカーチは，近代合理主義の核心が「計算可能性」にあることを指摘し，この計算可能性のカテゴリーは，商品交換それ自体にすでにふくまれているものであるとはいえ，それが「社会的カテゴリー」に発展し一般的原理となるのは，まさに資本制生産であり，協業，マニュファクチュア，機械と大工業への労働過程の展開によることを指摘している。

「手工業から出発して，協業，マニュファクチュアをへて機械工業へと労働過程が発展する道筋をたどれば，個人としての労働者の質的な特性がますます合理化されること，そしてそれがいよいよ強く排除されていくことがわかる。というのは，一方では労働過程がしだいに大きな規模で抽象的，合理的な部分的作業に分解され」るからである。「他方ではまた，こうした合理化の中で，そしてこの合理化の結果，合理的計画の基礎である社会的に必要な労働時間は……労働過程がいよいよ激しく機械化され合理化されるために……客観的に計算できる労苦となるからである」とかれはのべている。(25)

こうしてルカーチは「合理化の原理」をまず根本的に「計算可能性」に見出し，それが成立する条件として第一に「部分化，専門化」，第二に「静観的態度」を導きだす。したがって，これら三者の関係は一連の必然的な関係，不可分の「系」として考えられねばならない。それらが一連の必然的関係にあるほかないのは，もともとそれらが人間の社会的，共同的労働の全体的関連の中から抽出された社会的概念だからである。より正確にいえば，無限の価値増殖を目的とする資本制生産の発展とともに，人間の労働過程が蒙る根本的変革，主体としての人間がまきこまれる労働過程の社会的編成，さらにいえば「協業，マニュファクチュア，機械と大工業」という一連の生産様式の発展が人間労働に与える構造変化から抽象された概念だからである。人間はここで労働する以外には生きられないとすれば，この一連の原理は人間存在の原理そのものとならざるをえない。マルクスにとって，人間存在の本質的規定は労働だからである。

5. 労働過程の変容

以上の節で理論的，抽象的に二つの労働分割の編成原理を対比してきたが，この節ではさらに具体的に労働過程に即して人間労働の変容を考察してみたい。一言でいえば，それは人間の労働から質を奪ってゆく過程といえよう。

自立的な労働の原型を考えてみよう。最初に自立した労働の原型を設定するのは，単純商品生産の王国を歴史上に想定するためでは決してない。それはむしろ封建制の基礎ともなりえたものであ

注 (25) Georg Lukács; Geschichte und Klassenbewußtsein, Studien über Marxistische Dialektik, Berlin, 1923, Verdinglichung und das Bewußtsein des Proletariats, S 99, 平井訳，17頁。

るし，また資本制と相補関係にありうるものでもあり，さらにはルソーが絶えずなつかしむように，ローマの古典的共同体の経済的基盤にもなりえたものである。[26] しかしながら資本制的協業は「歴史的には農民経営および独立の手工業経営に対立して発展する」[27]のであるから，これを出発点に想定することは許されよう。ここでの労働を「銘入りの労働」と呼ぶこととする。なぜならその労働は誰にもできるような労働ではなく，かれの個性，かれの人格と結びついた，かれだけのものであり，それらと切りはなすことができないからである。だからこそかれはその製品に自分だけの銘をほり込むのである。そのような労働は個性的であると同時に有機的であり，かれは全過程の主人である。その労働のどの部分もかれのものであるだけではない。かれはその原料の選択からはじめるし，その道具はかれ自身のものであり，かれの肉体の延長であり，「仕事場もかれ自身のものである。だからその労働の成果もまたかれのものであり，そこにかれが銘をほり込むのはその結果であるにすぎない。ここでは技術もかれの人格と切り離すことができない。それは「ウデ」といわれるようにかれの個性の中に有機的にくみ込まれており，客観化されてはいない。この技術は秘伝，極意，奥儀，または「コツ」として個人的，有機的にだけ伝授されうるものである。

ここでは労働過程のどの部分もかれの人格と有機的な一体をなしており，かれの人格から切り離すことができない。刀鍛冶の労働を例にあげれば，原料たる鉄の成分や焼入れの際の湯の温度などは科学的に分析され，客観的な知識として伝達されることなく，かれの人格そのものの中に不可分に一体をなしているのである。したがってこのような労働のあり方は，一方では人間の自立性や個性を育てるものであるけれども，他方では封建的な人格的依存関係や支配服従関係，そして閉鎖的な同業組合の親方と徒弟の関係をつくりださざるをえないのである。

では作業場内労働分割における労働はどのようになるか。まずここでは上に考察した労働の有機的統一性があとかたもなく分解されている。かれの労働はもはや個性的ではない。いや，個性的であってはならない。なぜなら，いまやかれは自分の判断と自分の経験，自分の道具，自分の責任で個性的，全人格的に働いているのではなく，全体の一部として，全体の動きにくみ込まれた歯車の一つとして労働しているからである。ちょっとしたかれの気まぐれも，全体の構成を狂わせてしまうのである。個人の人格の中に積み上げられた「コツ」や「ウデ」や「秘伝」は，すべてその構成部分に分析され，単純な原理に還元され，再構成される。こうして人間の人格の有機的統一は分解し，知識が労働から分離し，銘入りの労働は消え去る。

ところで，こうして生産システムは人間の労働から個性を奪うのだが，人間の労働から個性が失われるということは，銘入りの労働が，誰がやっても同じ労働として個々の部分に分解され，その各部分が平均化され，標準化され，水平化された労働になることである。そうでなければ，それを

注（26）「資本論」第1部，560〜561頁，注24を参照。
（27）前掲書，560頁。

組立てた全体が一つのまとまりをもった完成品になることが保証されない。だからこの労働の世界の掟は，人間が自分自身であること，個性的であることをやめて平均的となり，みんなと同じになり，標準的になることである。そしてこの生産システムは，そうなればなるほど能率が上り，生産力は高まり，したがって市場を支配することができるようになる。はじめ「平均化現象」は，いやいやながらの必要悪であったが，やがて強制的な掟となり，ついには美徳となった。ここで生き，ここで勝ち残るためには「平均的」でなければならず，個性的であってはならない。定められた規則に従うこと，すべてを予測可能な数量の関係におきかえること，システムに対して能動的にふるまわず，受身の姿勢を保つこと，分け与えられた部分労働に専念すること，これらの姿勢がこの労働世界での掟であり美徳である。

資本制生産が価値増殖を生活原理とするかぎり，それは必然的に作業場内労働分割を展開させる。この過程はやがて機械と大工業を生み落し，そこでは労働ではなく，労働手段が舞台の主役となり，注目の的となる。労働手段が前面にでてくると，労働手段の発展と直接結びつく科学と技術が文化の推進者であるようにみえ，科学や技術を生みだす社会的諸前提が忘れ去られる。それと同時に，かつて労働手段の主人として，労働分割の単位として，はっきり姿をみせてきた労働と労働過程は，労働手段の陰にかくれて見えにくくなる。だが機械と大工業が作業場内労働分割の延長線上にあるものならば，そこにおける分割の原理と構造は，労働に注目しつづける限り生きつづけるものとみてよいだろう。機械と大工業における労働は，マニュファクチュアの労働分割原理が完成され，純化されたものとみることができよう。だとすれば，現代社会において資本が資本たるかぎり，生産の根本動因が価値増殖であるかぎり，ますます巨大化し，単に直接的な生産の場のみならず，あらゆる社会生活の場においてますます普遍的なものとなり，一般的な原理となっているこの作業場内労働分割の論理とその構造は，人間そのものにとって不可避の宿命になりつつあるというべきではないだろうか。くりかえしていえば，労働こそは人間の本質であり，人間存在それ自体であったからである。

自立した全体的労働者の姿に代る，部分化し，平均化し，比例数の鉄則に従属し，みずからの労働過程に対して受動的な態度をとる労働者の姿は，直接の生産の場だけでなく，私的資本の事務所にも，官庁にも，大学にも，政党にも，そして巨大化した労働組合にさえも，社会のあらゆる領域での一般的な現象となるであろう。いうまでもなくこれはウェーバーの官僚制の世界である。[28][29] 直接生産の場における作業場内労働分割の原理が，社会全体のあらゆる生活領域のすみずみにまで浸透

注 (28) 「資本論」の相対的剰余価値の部分を基礎に官僚制について論じているものとして，三戸公「官僚制」1973年があげられる。

(29) ルカーチがウェーバーの影響をうけていることは疑うことができない。ルカーチはこういっている。「資本主義の発展は，その欲求に照応し，その構造とぴったり一致した構成をもつ法とか，それに照応する国家などを創りだし

せざるをえないその論理は，稿を別にして論ずべきものである。だが二つの「労働分割」の基本構造を，社会思想の立場から考察することを目的とするこの稿においては，マニュファクチュア内労働分割にはじまる作業場内労働分割の原理が，資本制生産の展開とともにますます普遍的，一般的な原理となり，人間の宿命となることは確認しなければならない。

6. 結　び——二つの労働分割と社会思想

マルクスにおける二つの分業=労働分割を軸とするこの稿をしめくくるべき時がきた。ここでは自明のこととして積極的には論じなかった第一の労働分割，すなわち商品を媒介とする社会的労働分割は，人間を人格的依存関係から解き放ち，人間に人格的自立性をつくりだす。だがこの人格的自立性は，それとひきかえの物的依存関係によってのみ成り立っているのであり，人格的自立性は人間の社会関係の物象化のいわば代償である。(30) ルカーチが指摘するとおり，物象化は人間の労働力までもが商品となり，商品関係が普遍的カテゴリーになることによってはじめて完成する。だが逆説的なことに，労働力が商品となるという事実は，同時に人間の労働過程全体に巨大な変容をもたらさずにはいない。いわば第一の労働分割の完成，それによる人格的自立性の完成は同時にもう一つの労働分割を生みだす過程であり，協業，マニュファクチュア，機械のもとでの労働への歩みでもあったのである。もはや人間の人格的自立性は問題にはならない。そこでの原理は計算可能性，部分化，非能動性であることはいままでみてきたとおりである。第一の労働分割において人間は自立の個人となった。自由，平等，私有財産，契約，自己愛，これらホッブズ，ロック，ルソー，スミスに共通する近代市民社会の原理は，すべて商品を媒介として成立する労働分割の世界の産物であり，これこそ本来の社会思想史の幸福な研究領域であった。だが労働力もまた商品となり，私有財産となることによって人間は合理化，官僚制のもとに追いやられる。この第二の労働分割の世界では人は自由でもなければ平等でもない。ここではかれの労働さえかれ自身のものではなく，ここでは契約による交換も行われはしない。かれの美徳は計算可能な規則，部分化，没主観性である。この二つの労働分割の原理的矛盾はどのように解くべきであろうか。商品社会が紡ぎだす人格的自立性の原理は，労働力が商品化することによって完成する，と一方でいいながら，他方ではまさに労働力が商品化することによって人間が巨大なシステムの歯車となる，と同時にいうことができるのはなぜか。

た。資本主義経済と，その国家や法は，その構造が事実きわめてよく似ているので，近代資本主義を研究する歴史家でほんとうに洞察力のある人ならだれでも，このことを確認せざるをえなかったほどである。たとえば，マックス・ウェーバーは近代資本主義発展の基本原理をつぎのようにのべている。『近代国家と工場とはどちらかといえば，本質的にまったくおなじものである……』……」Lukács; ibid., S. 106-107, 邦訳，32頁。

注（30） マルクス「経済学批判要綱」高木監訳 I，79頁。

その秘密は「労働力」の概念それ自体の中にある。労働力の商品化によって人間はいわば二重化するのである。主体としての人間に即していえば，人間は労働力商品としての人間と，労働力商品所有者としての人間とに自己分裂し，二重化する。労働力商品としての人間は，直接的な生産の場において一個の商品となり，生産活動はすなわち労働力という一商品の消費過程であり，この場面が経済学の領域である。吠える獣に契約は存在しない，とのべたのはホッブズであるが，商品に人格も人権も契約もないのもまた明らかである。だが労働力商品所有者としての人間は，この財産所有者の共和国たる資本主義国家の主権者であり，権利と法の主人である。それゆえ客体的にいうならば，労働力の商品化と同時に人間の社会関係の領域もまた分裂し，二重化するといえよう。それは，人間が労働力商品としてのみ現象する経済の世界と，人間が（労働力）商品所有者として現れる法の世界への分裂である。あるいは経済学と法学はこのように分裂するといってもよい。現代社会が資本主義社会でありながら民主主義社会でもあるという秘密は，実に労働力商品そのものの性格の中にあると考えられる。

ところでこの第二の労働分割の世界，合理化と官僚制とM・ウェーバーの世界は，マルクスの思想と無縁のものなのであろうか。マルクスの思想が非合理主義ではないとすれば，われわれは自分自身の合理主義の根源をさぐらねばならないだろう。レーヴィットがいうように，マルクスは疎外の概念を，ウェーバーは合理化の概念を鍵として人間の運命をよみ解こうとしたのだが，[31] 疎外と合理化の二つの研究方向は関連づけることができないものだろうか。現在，マルクスとウェーバーの研究は大ざっぱにいって分業化，労働分割化されており，その思想史的連関は確立されてはいない。本稿はささやかではあるが，マルクス没後百年を機に，マルクスの理論体系そのもののうちに，現代の「合理化」原理の成立の根拠とその構造，そしてその限界を分析しようとするものであった。

さいごに合理化の原理の限界について一言つけ加えておきたい。合理化の原理が資本制生産が生みだす作業場内労働分割にその根拠をもつとすれば，その限界もまたこの労働分割とともにある。現代社会においていかにこの分割原理が普遍化し，その包括領域が巨大化するとしても，それが作業場内労働分割の原理であり，その意味で部分社会の原理であるかぎり，社会全体を包含することができず，全体社会はその論理の外にとどまらざるをえない。全体社会は資本主義が資本主義であるかぎり，合理化できない聖域としてその外にとどまるのである。それは社会内労働分割の世界であり，自由な競争が支配する市場の非合理の世界である。合理化の原理が，その極限においてみずからの原理を断念せざるをえないことも，またこの原理の限界を示している。この限界を克服する道は今後のわれわれの課題として残しておくことにしたい。

（経済学部教授）

注 (31) Karl Löwith; Max Weber und Karl Marx, 1932, in: Gesammelte Abhandlungen, Stuttgart, 1960, S. 7. 柴田他訳，20頁。